

# 空晴れて

小川未明

青空文庫



山間の寂しい村には、秋が早くきました。一時、木々の葉が紅葉して、さながら火の燃えついたように美しかったのもつかの間であつて、身をきるようなあらしのたびに、山はやせ、やがて、その後によつてくる、長い沈黙の冬に移らんとしていたのです。そこにあつた、みすぼらしい小学校へは、遠く隣村から通つてくる年老つた先生がありました。日の長い夏のころは、さほどでもなかつたが、じきに暮れかかるこのごろでは、帰りに峠を一つ越すと、もう暗くなつてしまふのでした。

「先生、天気が変わりそうです。早くお帰りなさいといけません。」

少年小使いの小田賢一は、いったのでした。子供たちは、すべて去つてしまつて、学校の中は、空き家にも等しかったのです。教員室には、老先生が、ただ一人残つて、机の上をかたづけていられました。

「小田くん、すこし、漢文を見てあげよう。用がすんだら、ここにきたまえ。」と、老先生は、いわれた。

「先生、しかし、あらしになりそうです。また暗くなつて、お帰りにお困りですから。」と、小田は、遠慮したのでした。

彼は、この小学校を卒業したのだけれど、家が貧しくて、その上の学校へは、もとより上がることができなく、小使いに雇われたのでした。そして、夜は、この学校に泊まって、留守番をしていました。雪がたくさんに積もると、老先生も、冬の間だけ、学校に寄宿されることもありました。

先生は、小田が忠実であつて、信用のおける人物であることは、とうから見いられたので、彼に、学問をさしたら、ますます善い人間になると思われたから、このごろ、暇のあるときは、わざわざ残つて「孝経」を教えていられたのです。

ぱらぱらといつて、落ち葉が、風に飛ばされてきて、窓のガラス戸に当たる音がして、いきました。

「子曰夫孝天之經也。地之義也。民之行也。——この経は、サダマリというの

だ。そして、義は、ここでは道理という意味であつて、民は即ち人、行はこれをツトメと  
いうのだ。」と、老先生は、教えていられました。賢一は、頭を垂れて、書物の上を  
見つめて、先生のおつしやることを、よく心に銘じてきいていました。

やがて、講義が終わると、先生は、眼鏡ごしに、小田を見ていられたが、  
「時に小田くん、君はたしか三男であつたな。」と、きかれた。

「はい、そうです。」

「べつに、農を助ける人でないようだな。それなら、東京へ出て働いてみないか。いや、みだりに都会へゆけとすすめるのでない。」と、先生は、おつしやられた。

「先生、私はまだそんなことを考えたことがございません。」

「いや、それにちがいない。どこも就職難は同じい。ことに都会はなおさらだときいている。それを、こういうのも、じつは、昔、私の教えた子で、山本という感心な少年があつた。父親は、怠け者で、その子の教育ができないために、行商にきた人にくれたのが、いま一人前の男となつて、都会で相当な店を出している。このあいだから、だれか信用のおける小僧さんをさがしてくれと、私のところへ頼んできているのだが、どうだな、苦勞もしてきた主人だから、ゆけばきつと、君のためになるとは思うが。」と、先生は、いわれたのでした。

「今夜、ひとつよく考えてみます。」と、賢一ははつきりと答えた。

先生は、帰る仕度をなされた。彼は、途中まで先生を送つたのです。

橋を渡ると、水がさらさらといつて、岩に激して、白く砕けていました。ところどころにある、つたうるしが真つ赤になつていました。なんの鳥か、人の話し声と足音に驚い

て、こちらの岸から、飛びたつて、あなたの岸のしげみに隠れた。彼は、先生と別れてから、独り峠の上に立ちました。まだそこだけは明るく、あわただしく松林の頭を越えて、海の方へ雲の駆けてゆくのがながめられたのでした。

その夜、小使い室の障子の破れから、冷たい風が吹き込んできました。賢一は常のごとくまくらに頭をつけたけれど、ぐつぐつとすぐに眠りに陥ることができなかつた。

「都会が、いたずらに華美であり、浮薄であることを知らぬのでない。自分は、かつて都会をあこがれはしなかつた。けれど、立身の機会は、つかまなければならぬ。世の中へ出るには、ただあせつてもだめだ。けれど、また機会というものがある。藤本先生は、私に、機会を与えてくださったのだ。先生のお言葉に従つて、ゆくことにしよう。」と、思つたのでした。

晩方から、変わりそうに見えた空は、夜中から、ついに、はげしいしぐれとなりました。彼は、朝早く起きて、学校の中のそうじをきれいにしました。そして、囲炉裏に火を起こして、鉄瓶をかけて、先生たちがいらしたら、お茶をあげる用意をしました。そのうち、もう生徒たちがやってきました。やがて、いつものごとく授業が始まりました。

休みの時間に、彼は、老先生の前へ行って、東京へ出る、決心をしたことを告げると、

「君がいつてくれたら、山本くんも喜ぶだろう。ただ注意することは、第一に、なにことも忍耐だ。つぎに、男子というものは、心に思ったことは、はきはきと返事をすることを忘れてはならぬ。これは、使われるものの心得おくべきことだ。」といわれたのでした。

賢一は、老先生のお言葉をありがたく思いました。そして、この温情深い先生の膝下から、遠く離れるのを、心のうちで、どんなにさびしく思ったかしれません。

こうして、彼は、ついに東京の人となりました。

きた当座は、自転車に乗るけいこを付近の空き地について、することにしました。また、電話をかけることを習いました。まだ田舎にいて、経験がなかったからです。山本薪炭商の主人は、先生からきいたごとく、さすがに苦労してきた人だけであつて、はじめて田舎から出てきた賢一のめんどうをよくみてくれました。薪や炭や、石炭を生産地から直接輸入して、その卸や、小売りをしているので、あるときは、駅に到着した荷物の上げ下ろしを監督したり、またリヤカーに積んで、小売り先へ

運ぶこともあれば、日に幾たびとなく自転車につけて、得意先に届けなければならぬこともありました。

彼は、自転車のけいこをしながら、いつか空き地に遊んでいる近所の子供たちと仲良しになりました。子供を好きな彼は、そこに田舎の子と都会の子と、なんら純情に  
おいて、差別のあるのを見いださなかつたのでした。

「お兄さん、上手に乗れるようになったのね。」と、女の子や、男の子らは、彼の周囲に集まってきていいました。

賢一は、こうした子供たちを見るにつけ、もはや、ときどきは、しぐれと混じって降るであろう故郷の村に、毎日学校へ集まってくる親しみ深い生徒らの姿を目に浮かべました。「こちらは、こんないい天気だのになあ。」と、同じ太陽でありながら、その地方によつて、与える恵慈の相違を考えずにはいられなかつたのです。彼は、藤本先生にも、

「こちらへきて、幸福の一つは、晴れわたつた青い空を見られることですが、それにつけ、いつそう、あのさびしい山国で、働く人たちのことを思います。」と、書いたのであります。



ある日、彼は、往來のはげしいにぎやかな道を自転車に乗って走っていました。このとき、横あいから前に出た老人があつたが、ふいのことであり、彼は、この老人を傷つけまいとの一念から、とつさにハンドルをまわしたので、おりから疾走してきた自動車に触れて、はねとばされたのでした。

彼は、直ちに病院へかつぎ込まれました。傷は幸いに脚の挫折だけであつて、ほかはたいしたことがなく、もとより生命に關するほどではなかつたのです。主人はそれ以来、日に幾たびとなく、病院に彼をみまいました。

「今日は、気分はどんなだね。」と、たずねました。

賢一は、痛ましくも、頭から足先まで、白いほうたいをして、横になつていました。

「だいぶん、痛みがとれました。」と、彼は、答えた。

「まあ、たいしたけがでなくてよかつた。なにしろ、東京では、日に幾人ということなく、自動車や、トラックの犠牲となつてゐるから、この後も、よく気をつけなければならぬ。それに較べると、田舎は、安心して道が歩けるし、しぜん人の気持ちも、のんびりとしてゐるのだね。」と、主人は、いいました。

「そうだと思います。しかし、私の不注意から、ご心配をかけましてすみません。」

「君は、おばあさんをかばおうとしたばかりに、自分がけがをしたという話だが、私は、君の誠実に感心するよ。」

「あのときは、ただ老人をひいてはたいへんだという心だけで、ほかのものが目に入らなかつたのです。」

こういつて、賢一は、まことに危険だつた当時を追想しました。

「君がきてくれて、私は、いい協力者ができたと思つている。人は、たくさんあつても、信用のおける人というものは、存外少ないものだ。」と、いつて、主人は賢一をばげましてくれました。賢一は、ただ、その厚情に感謝しました。彼は負傷したことを故郷の親にも、老先生にも知らさなかつたのです。孝経の中に身体髪膚受之父母。不敢毀傷孝之始也。と、いつてあつた。

彼は、自分の未だ至らぬのを心の中で、悔いたのでありました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「空《そら》晴《は》れて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 空晴れて

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>